

奈良・平城京左京三条二坊宮跡庭園跡

1 所在地 奈良市三条大路一丁目の五（旧尼ヶ辻ゴドザ甲六六

九の二）

2 調査期間 一九八〇年（昭55）一月～二月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 狩野 久・岡田英男

5 遺跡の種類 庭園跡

6 遺跡の年代 奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査区をふくむ地点は、一九七五年（昭和50）に奈良郵便局移転計画地として発掘調査が行なわれ、平城京左京三条二坊六坪の中心に奈良時代の大規模な園池と、それにもない計画的に配置された建物群・塀・溝・井戸・導水路などが検出された。その後一九七七年（昭和52）にも、さらに接続地の調査によって園池北方の建物群の様相が明らかとなり、翌七八年には、平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園として特別史跡に指定されている。今回の調査は、指定地北部に奈良市の市民文化センターが建設されることになったため、同市の委託により奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が一九八〇年一月から二月にかけて、未発掘地五〇〇㎡を調査したもので

ある。

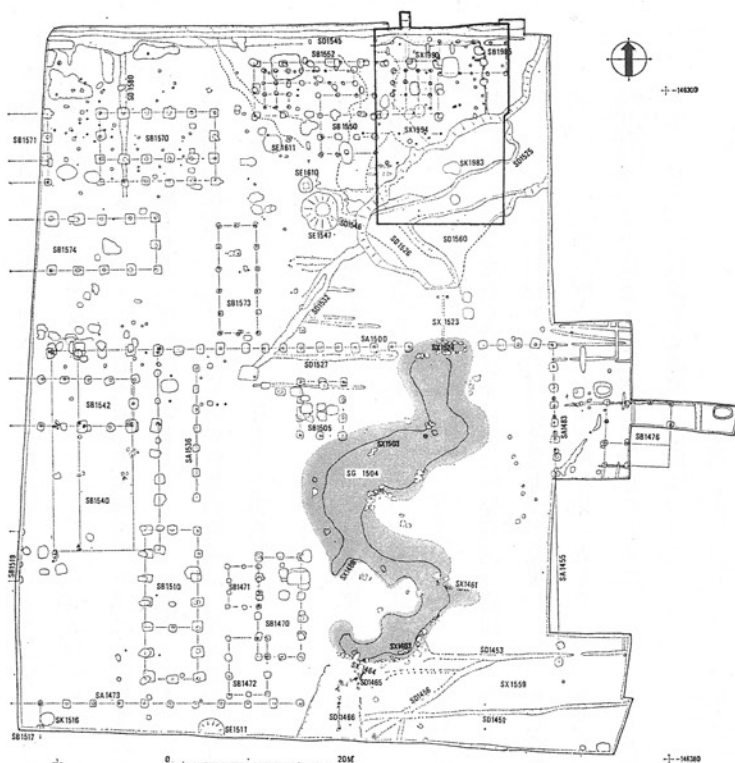
今回までの調査による遺跡の概要は次の如くである。遺構は大きく二つの時期に分けられ、まずA―1期には坪の中心に平均幅一五m、延長五五mの石組・石敷の園池が造られる。そしてこの園池を囲む二条の東西塀によって、六坪は南北一四〇尺ずつに三等分されることになる。園池の西から北にかけて、この期の掘立柱建物等は坪の中心から一〇尺単位で割りつけられており、A―2期になると坪中心から七尺単位の割りつけでさらにいくつかの建物の新設がみられる。つづくB期には、園池はそのまま存続するが、A期の建物はすべて取払われて大改作が行なわれている。この時期の礎石建物一棟をふくむ建物群も、七尺単位の割りつけによる配置をとっている。そして、以上のA・B両期にわたり園池の存続した年代は、出土した木簡や遺物からほぼ奈良時代を通じたものと比定されるのである。

出土遺物をみると、日常雑器的な土器・木製品が少なく、瓦がいずれも平城宮出土のものと同型であり、木簡に「北宮」等天皇のかかわりをうかがわせるものがある、などの点が特徴としてあげられる。右のことと、園池の形状が曲水宴にふさわしいものとみられることから、東西塀によって区画された中央区を園池を中心とした公的な宴遊の施設と考え、また北方区は園池の管理等にかかわる家政機関的ブロックと推定することが可能である。

以上のような遺跡の構成のうち、今回の調査区は園池北方の園池への導水路がかかる部分に当たり、検出した遺構は掘立柱建物二・堀一・溝三・土塋三などであった。木簡はすべてが導水路から出土している。導水路は、東北から南西に向かう幅一二m程の旧河川の流路を利用し、その堆積層を切り込んで掘られた幅約二・五m、深さ約〇・四mの素掘りの溝である。堆積は三層に分かれるが、そのうち下層の二層から木簡三八点が出土した。すでに一九七五年の調査でも導水路のつづきの同じ層から計六四点の木簡が出土しており、今回とあわせると導水路出土木簡は総計一〇二点に及ぶことになる。なお、今回導水路の北岸の小土塋から「侍従」の記載をもつ墨書土器が出土している。

8 木簡の积文・内容

- (1)・「竹野王子大許進米三升」
[受稻] [積カ]
「六日百嶋」
183×23×9 011
- (2)・「四月十四日記若」
「進米二升」
185×18×4 011
- (3)・「田官里俵」
(142)×19×2 039
- (4)・「北宮御物俵」
(87)×23×4 039
- ・「阿須波里」
(87)×23×4 039



- (5)・「遠江國石田郡□□万呂」
 ・「五斗」
 122×17×5 033
- (6)・「入奈加良進出御帳□辛積×」
 (124)×29×3 081
- (7)・「和銅三年四月十日阿刀」
 ・「マ志祁太女春米」
 (109)×20×3 039
- (8)・「賣斐□×」
 ・「止為故長□×」
 (53)×(24)×2 081
- (9)・「□□後又意富□□□□×」
 (197)×24×5 081
- (10)・「從二升□□□□升□□□三升奴長四升半」
 ・「右一斗五升□ 四月廿三日□末呂」
 (261)×(44)×4 019
- 今回出土の紀年木簡には和銅三年(七一〇)の一点(7)があり、前回の和銅五年・七年の例や他の地名表記ともあわせて、平城遷都早々の園池の造営時期を示している。(1)・(2)は少量の米の進上——おそらく京内での移動——にかかわる木簡で、いずれも短冊型の文書木簡。(1)の「竹野王子」は明日香村竜福寺に残る天平勝宝三年(七五二)銘石塔の建立者竹野王と同一人物か。また(4)は前回出土の「北宮俵」(表)、「鴨郡」(裏)〔(86)×19×4 039〕の例とあわせて、宛

先を「北宮」と題した地方郡里からの貢進物付札であり、国名を欠いた地名表記ともども記載様式が注目される。その他出土木簡の主な特徴を列記すると、(6)や(8)にみられる万葉仮名の使用、(4)や(6)、そして前回出土木簡「御坏物直米二升充奉」(裏)、「受古女 九月三日 日掠垣忌寸」(裏)〔(160)×30×3 011(下端に小孔)〕の「御坏物」といった「御」字の表記、(1)・(10)や右掲前回の木簡で、下端に木簡整理のためかと思われる小孔が穿たれていること、などがあげられる。これらの木簡の検討、そして宮跡庭園の性格の究明は、平城京の研究にさらに豊富な肉付を与えてくれるものと思われる。

9 関係文献

- 奈良市教育委員会
 田中哲雄 『平城京左京三條二坊六坪発掘調査概報』一九八〇年
 『平城京左京三條二坊六坪の庭園遺跡』
 (『仏教芸術』一〇九) 一九七六年
- 奈良国立文化財研究所
 同 『平城京左京三條二坊六坪発掘調査概報』一九七六年
 『昭和52年度平城宮跡発掘調査概報』 一九七八年
 同 『奈良国立文化財研究所年報一九七八』 一九七八年
 奈良県文化財保存対策連絡会
 本中 真 『平城京・庭園遺跡の保存のために』 一九七八年
 『古代曲水宴遺構の流連について』
 (『造園雑誌』四三—三) 一九八〇年

(佐藤 信)